

「勝利者であるイエス」(要旨)

聖書箇所：マタイ 8:28-34

「南方のキリスト教」：アフリカ、アジア、ラテンアメリカ。
2050年、白人キリスト者は全体の2割と予測¹。

【1】 イエスを迎えた二人

主イエスの一行が到着したガダラ人の地は、ガリラヤ湖東岸の切り立った断崖が湖に突き出た場所でした。豚が飼育されていたことから、異邦人が多く住んでいたことが推察されます(8:32)。イエスを迎えたのは悪霊につかれた二人でした。彼らは墓場を住処にし、「ひどく凶暴」(28)でした。町の人々は、こうした二人を町の外れの墓場に鎖で繋ぎ止めようとしてしました(マルコ5:3-4)。

湖上の嵐が外から人に脅威を与えるのに対し、悪霊は人の内に働きかけ、正しく考え振る舞うことを不可能にします。二人は人間性を喪失し、自分の意思に反して墓場を徘徊し、旅人を脅かす存在となっていたのです。自分で自分を制御できない「二人」。その「二人」を自分たちの視界から遠ざけることしかできない町の人々。聖書は、限界のある人間の姿を伝えます。

【2】 神の子よ

悪霊につかれた人は、開口一番、「神の子よ…」(29)と叫びました。真っ先にイエスが何者であるのかを言い当てました。悪霊はイエスの権威を受け入れたくなかったけれども、その権威を認めていたからです。彼らは自分たちが最後の審判(黙示録20:10)の時に滅ぼされることも知っていたので、「まだその時ではないのに、もう私たちに苦しめに来たのですか」(29)と述べました。彼らはイエスに懇願して豚の群れの中に入ったものの、群れもろとも湖になだれ込み、おぼれ死にました。当時の「巡回祈祷師」(使徒19:13)とは異なり、イエスのことばそのものに権威と力がありました(8:26)。二千匹の豚と引き換えに悪霊につかれた人は正気に

戻ったのでした(マルコ5:13)。イエスのことを知っているイコール信仰にはなりません。悪霊はイエスが「神の子」と言い当て、イエスを恐れました。しかし彼らはイエスに敵対しました。町中の人々もイエスのなさったことを知りました(マタイ8:33-34)。彼らは可視的にイエスのことばが成就したことを目撃しました。しかしそれが信仰に結びつきませんでした。豚の損失へのショックが大きかったのでしょう。そして、イエスの力を害とし、受け入れることを拒絶しました。イエスについての知識や奇跡の目撃が、必ずしも人を信仰へと導くわけではないようです。

【3】 勝利者であるイエス

私たちは、説明のつかないことを自分の目につくところに置きたくないと考えることがあります。ガダラの人々もそうでした。悪霊につかれた二人の取り扱いに苦慮したことでしょう。結果彼らは墓場に追いやられました。人に危害を与えかねないので、やむを得なかったのです。イエスは、人目に触れない場所に追いやられた二人の人間性を回復させました。それだけではありません、家族のところに帰り、主のあわれみを証しする者へと社会復帰を促されたのでした(マルコ5:19)。聖書記者は、イエスが病人を癒し、嵐を鎮め、悪霊に勝利をおさめたことを伝えます。こうした神の働きを、今日の私たちはどのように受け止めているのでしょうか。

「…『活ける神』への立ち返りと素朴な信仰のリアリティーの恢復(かいふく)なしには、日本の教会の新しい出発はない²」

▷過去の遺物の観察者ではなく、『活ける神』に信頼して歩むことができま
すように。



¹ Philip Jenkins, *The Next Christendom: The Coming of Global Christianity*. Oxford University Press, 2002

² 井上良雄「神の国の証人ブルームハルト父子」信教出版